

〔査読論文〕

成瀬家本「長篠合戦図屏風」における図様形成の一考察 ― 絵図から屏風へ ―

小口 康仁

はじめに

一七世紀に成立した画題のひとつに戦国合戦図がある⁽¹⁾。戦国武将たちのいくさを屏風形式で描く作品群で、川中島、姉川、長篠、耳川、賤ヶ岳、小牧・長久手、文禄・慶長、関ヶ原、長谷堂、大坂冬の陣、大坂夏の陣、島原などが認められる⁽²⁾。その主題は、徳川家が幕府を創業するまでの過程において高く評価されたいくさが多い。これらの作品群は、主として一七世紀後期に制作された。

これまで戦国合戦図は、制作意図や注文主に焦点をあてる議論が重ねられてきた。その一方で、絵画史的な見地からは等閑視され続けてきたため、様式や制作絵師など、今後順に明らかにしていくべき課題を有する一群である。

本稿で取り上げる「長篠合戦図屏風」は、現存する戦国合戦図の中で最も多い主題で、天正三年（一五七五）に、武田勝頼軍と徳川家康・織田信長の連合軍が、三河国（現在の愛知県新城市付近）の長篠・設楽原において交戦したいくさを描く。

現在、「長篠合戦図屏風」は一三点ほどが確認でき、その制作は一七世紀から一九世紀にわたる⁽⁴⁾。その初期の作例は、名古屋博物館所蔵の六曲一隻屏風である（以下、名古屋市博本）（図1）。画面全体を通して徳川・織田連合軍の陣営を描くことから、対となるもう片隻に武田軍を描き、六曲一双で長篠合戦を表していたものが、片隻のみ伝わったとみられている。上瞼に濃い墨を入れる人物表現や、馬の描写などから狩野派の手によるものと並木誠士氏によって指摘され、金雲と金のすやり霞が混在する表現から、一七世紀半ばの制作と推定されている⁽⁵⁾。

その後、この「長篠合戦図屏風」の祖型となったのは、尾張藩付家老成瀬家に伝来した成瀬家本である⁽⁶⁾。名古屋市博本系の図様を一隻に集約させた作品であり（図2）、本作以降松浦史料博物館本のように構図やモチーフをそのまま踏襲するものと、旧浦野家本（豊田市郷土資料館蔵）（図3）や徳川美術館本（六曲一隻）（図4）のように、構図を踏襲しつつモチーフにやや変更を加える二系統にわかれた⁽⁷⁾。

また成瀬家には、『享和元酉年長篠長久手御陣場之図御屏風、雪村

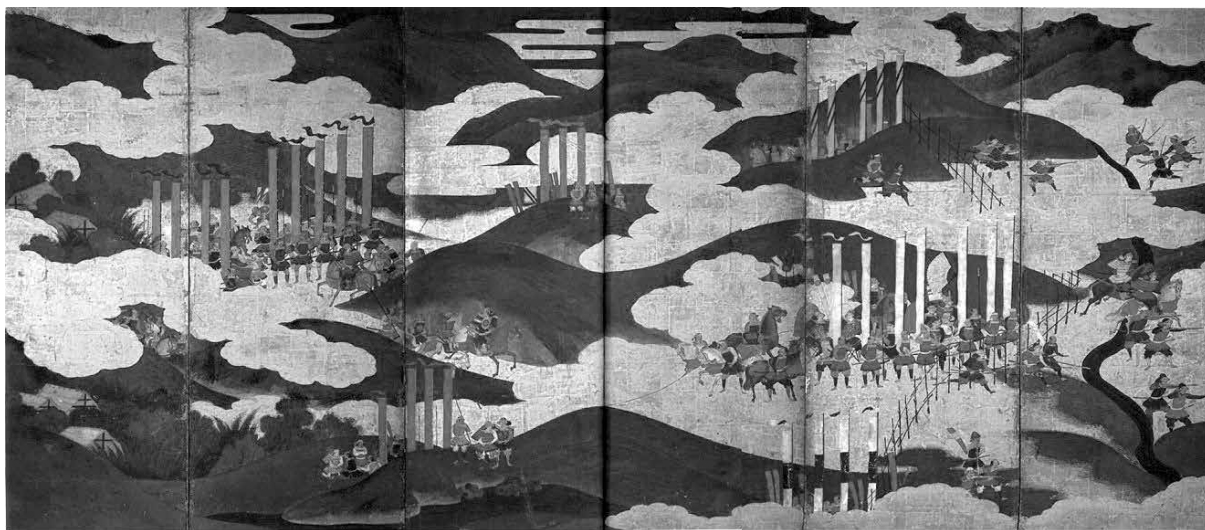


図1 「長篠合戦図屏風」 名古屋市博物館 六曲一隻 17世紀中期 紙本金地着色 155.2 × 358.0cm



図2 「長篠合戦図屏風」 犬山城白帝文庫（成瀬家本） 六曲一隻 17世紀後期 紙本着色 165.2 × 350.8cm

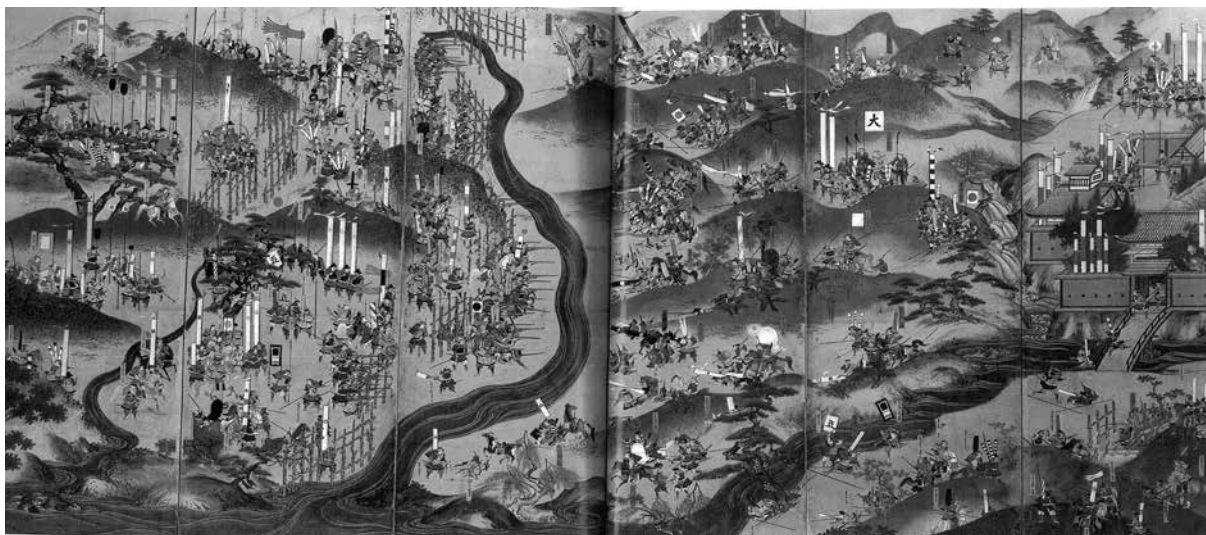


図3 「長篠合戦図屏風」 豊田市郷土資料館（旧浦野家本） 六曲一隻 18世紀 紙本着色 156.1 × 350.8cm

筆剣研鍾馗之画、入上覧候留』という冊子が伝わることから、成瀬家本が享和元年（一八〇一）に一代将軍家斉の御覧に供されたと思われる^⑧。将軍家や尾張徳川家から、たびたび成瀬家本の閲覧希望があったため、このような借覧要請に応えられるよう、貸出用の副本が用意されたほどであった^⑨。

そして、現存最も時代が下る東京国立博物館所蔵「長篠合戦図屏風」下絵（以下、東博本下絵）では、六面から八面へ拡張した画面内で、より臨場感が増した合戦表現へと展開する（図5）。

本稿は、「長篠合戦図」の祖型となった一七世紀後期制作の成瀬家本における図様形成に着目する。本図の画面は地形表現と人物表現に大別でき、地形表現について並木誠士氏は、絵図との関係を指摘されている^⑩。俯瞰的な視点で山を貼りつけるようにあらわす独特な表現に加え、川の流れも地形とのかかわりで上から見たようにあらわされており、地図における川の描写に近いとする。続けて、こういった地図的なものが先行して存在し、その視覚の名残をとどめるかたちで画面の屏風に描かれたとされた。

本稿ではこの指摘を受け、成瀬家本の表現が絵図の地形描写にどのくらい忠実なのか、具体的にどのような地図（以下、「絵図」と表記する）が参考にされたのか、実際の絵図との比較を通して明らかにしてみたい。

一 「長篠合戦図屏風」について

「長篠合戦図屏風」の説明をしていく前に、まず合戦の基本情報に言及する。長篠合戦とは、天正三年（一五七五）に三河国（現在の愛



図4 「長篠合戦図屏風」 徳川美術館 六曲一隻 18世紀後期～19世紀初期 紙本着色 159.5 × 379.8cm

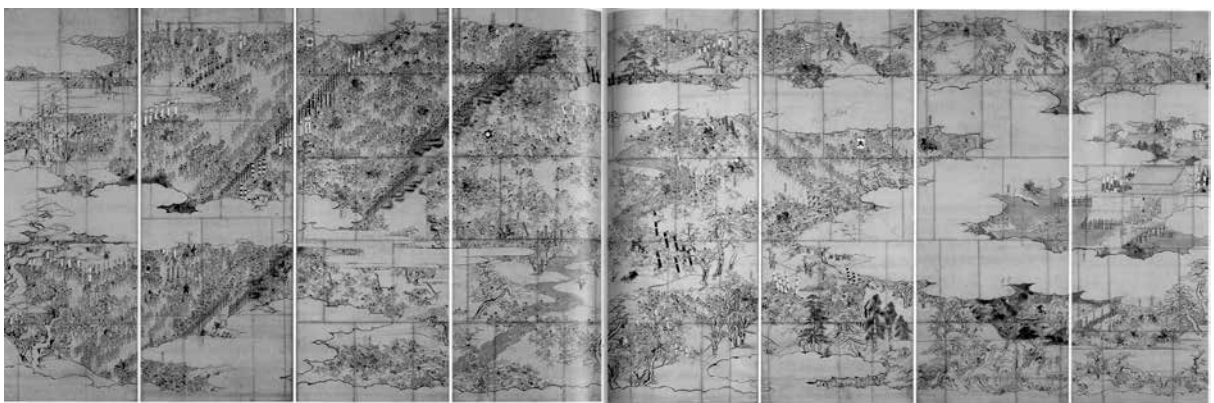


図5 「長篠合戦図屏風下絵」 東京国立博物館 八幅 19世紀 紙本墨画一部着色
(第1・8幅) 166.4 × 57.6cm (第2～7幅) 166.4 × 63.4cm

知県新城市付近)の長篠・設楽原において、徳川領内に侵攻してきた武田勝頼軍を徳川家康・織田信長の連合軍が迎え撃ったいくさである。連合軍は、鉄砲を巧みに使い、武田の騎馬武者を圧倒したといわれる。開戦の一年ほど前に勝頼は西に向け侵攻し始め、まず信長の領国であった東美濃に侵攻し、さらに家康の領国遠江に進軍、難攻不落の高山神城を落とした。連戦連勝を続けた武田軍は、翌四月には一万五千の兵で家康の本拠地三河に攻め入る。五月一日、家康の家臣奥平貞昌が守る長篠城に到着し、周囲の山々に砦を築き取り囲んだ。一三日、信長は家康の求めに応じて岐阜城から出陣し、その兵力は三万に及んだ。翌一四日、織田軍は三河国岡崎城に到着、これで徳川・織田連合軍は三万八千に上り、長篠城から少し離れた設楽原に布陣する。この地は北に雁峰山、南に豊川が流れているため、武田軍の側面からの攻撃を防げる地形であった。

一方、武田軍による長篠城攻めは膠着状態にあった。城内の兵は五〇〇余であったが、城主奥平貞昌が必至の抵抗を続けたゆえである。五月二〇日、勝頼は三千の兵を長篠城付近に残して設楽原に進軍し、川を挟んで対峙する。翌二十一日長篠合戦が始まった。勝頼は、連合軍の出方を見ながら慎重に攻撃を仕掛ける。『信長公記』によると、この時の連合軍は背後の丘陵に兵を隠し、実際よりも少なく見せていたとある。開戦から一刻ほど経過したとき、勝頼のもとに徳川軍の酒井忠次隊から奇襲を受けたとの知らせが届く。武田軍の背後は断たれたが、目視できる正面の敵は少なかったことから、勝頼は総攻撃の決断に至る。結果、合戦は連合軍の勝利に終わり、勝頼は初めての大敗を喫した^⑪。

現在の評価として、長篠合戦は織田信長が鉄砲を用いた新戦術によ

り、戦国最強といわれた武田の騎馬隊を打破したいくさとして語られる^⑫。江戸時代には、武田勝頼の父・信玄に大敗した三方ヶ原の戦い(元龜三年・一五七三)の雪辱を、徳川家康が晴らしたいくさとしての意味合いが強く、三河武士の活躍を顕彰する恰好の題材となった^⑬。

それでは、この長篠合戦を描く屏風にはどのような作品が現存するのか、冒頭で触れたモチーフの改変がみられる系統の作品を年代順にみていく。

・名古屋市博本

長篠合戦を主題にする現存最古の屏風である。その画面は連合軍の描写のみ確認できることから、元来一双屏風であったものが片隻のみ伝わたとみられている。武田軍を描いていたであろう失われた片隻の図様は不明だが、第一扇の上部にみる武田兵がいずれも穏やかな表現で描かれることから、成瀬家本のように連合軍の鉄砲の前に倒れゆく悲惨な光景ではなかったと推察する。

人物表現は、全体を通して身振り手振りが穏やかであり、合戦図によくみる流血表現は認められない。一七世紀前期制作の「関ヶ原合戦図屏風」(津軽屏風・大阪歴史博物館所蔵)と類似する様式であり、本作はそれよりやや後の、一七世紀前中期頃の制作と考えられる。金雲を多数配し、同主題屏風の中で山や川、人物を大きく描く特徴があり、合戦の生々しい表現を避ける傾向がある。

・成瀬家本

名古屋市博本の構図を踏襲しつつも一隻で完結させ、「小牧長久手合戦図屏風」と組み合わせで一雙とする。『大猷公記』寛永二年

(一六二五)二月一七日条に「正成が父、正一嘗長篠の戦図を絵ひて屏風とす。正成、又長湫の戦図を画く、以て一双とす、之を子孫に伝ふ」とあり、元和六年(一六二〇)に没した正一が「長篠合戦図屏風」、その子正成が「小牧長久手合戦図屏風」の制作を命じ、一双屏風として子孫に伝えたとわかる。⁽¹⁴⁾正一は長篠合戦で武田兵の旗指物を識別する役目を果たし、正成は小牧長久手合戦において初陣を果たしたことから、成瀬家の礎を築いた両者の武功を表象するために制作されたと考えられる。これ以降の「長篠合戦図屏風」は、「小牧長久手合戦図屏風」とともに一双形式で制作されていく。

本図は、戦場の光景を生々しく表現する。第一扇、二扇で長篠城の攻防戦を、第三扇以降で主戦場である設楽原の合戦を描く。最も注目されるのは、中心で展開する徳川・織田連合軍の鉄砲を用いた攻撃と、それを真正面から受けて次々と倒れゆく武田軍の姿である。戦国合戦図は、白兵戦による混戦の様子を描くことが多いなか、このように一方的な圧勝をあらわす例は珍しい。名古屋市博本と比べると、画面をとらえる視点が高くなり、合戦全体を俯瞰的に描写する。山川を小さく描く特異な描法であり、旗指物などを豊富にし、人物が特定できるよう大きく描いて焦点をあてる。名古屋市博本でみられた金雲を排除し、山や川などの自然景は上から貼り付けたような特徴を有する。

・旧浦野家本

成瀬家本以降の制作である旧浦野家本は、成瀬家から渡邊家に養女に出た姫君が、浦野家に嫁入りする際に持参したという伝承をもつ。長篠合戦に参戦した渡邊守綱の活躍を強調する点から、渡邊家の注文により制作されたと考えられる。⁽¹⁵⁾成瀬家本の構図を踏襲する一方で、

モチーフの改変が認められる。それは山川の描写を整理し、山を少なくすることにより、戦う武士たちに焦点があたるように工夫されている。

一方の川は成瀬家本より水嵩が増し、川筋をはっきりと表現する。特に連吾川は、異様なほど川幅を広くしたため、画面の中心でひときわ目立つ描写となっている。

特に注目すべきは、連合軍の鉄砲隊の足軽が数人倒れている点である⁽¹⁶⁾(図6)。それまでの同主題屏風には認められない表現であり、武田軍の奮闘を加味している。さらに第五扇中ほどにみる徳川家康は、松の葉で姿が隠されている。これは享保七年(一七二二)以降に顕著となった、家康神格化の描写と考えられる。⁽¹⁷⁾

・徳川美術館本

尾張徳川家の注文により、一八世紀後期から一九世紀にかかる時期に制作されたとみられる。⁽¹⁸⁾成瀬家本を踏襲しつつ、個々のモチーフを

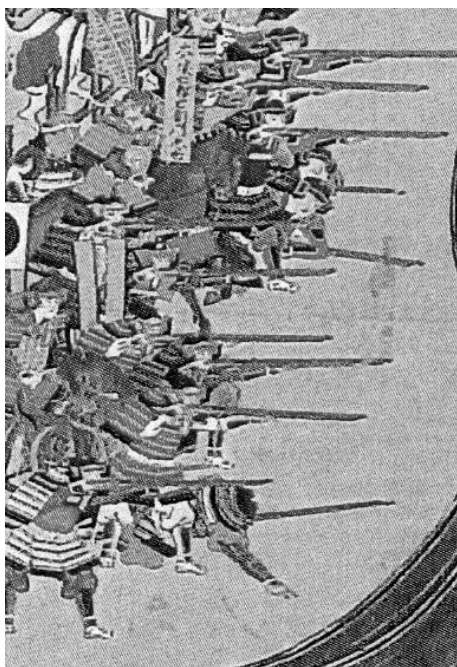


図6 連合軍鉄砲隊
(旧浦野家本 第4扇中程)

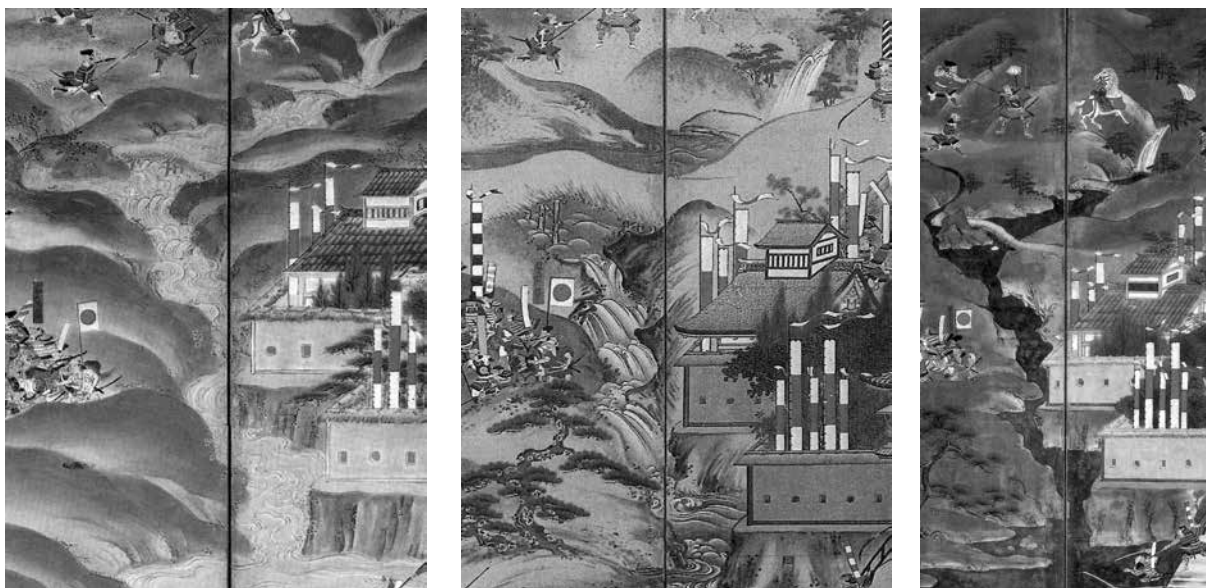


図7 川（瀧川）の表現（第1扇）
右：成瀬家本 中：旧浦野家本 左：徳川美術館本

改変することで、より臨場感をあらわす工夫が施される。自然描写は、成瀬家本以上に山を多く描き、画面上部に山を幾重にも連ねることで、屏風の枠外へと続く空間の広がりあらわす。川は旧浦野家本以降に増えた水量を踏襲し、より絵画的な表現に近づけている（図7）。

さらに、合戦表現の臨場感が増している。第四扇にみえる連合軍の鉄砲隊には、それまでにはない発射された鉄砲の黒煙が追加される。

また、人物表現にも変化がみえ、徳川家康周辺の家臣らの顔には、成瀬家本にはみられない口髭を追加している。⁽¹⁹⁾ 成瀬家本が制作された一七世紀後期は、徳川家綱による大髭禁止令の影響から、戦国の遺風としての口髭が憚られたためである。⁽²⁰⁾ 徳川美術館本にみる黒煙や口髭の追加は、戦国合戦をより臨場感をもって再現する趣向と解することができる。

・東博本下絵

八曲一隻屏風の下絵とみられ、明治一九年（一八八六）に木挽町狩野家の子孫である狩野謙柄氏より寄贈された。本作は八幅からなり、一九世紀に徳川將軍家奥向から依頼されたものである。⁽²¹⁾

画面全体の構図は成瀬家本を踏襲し、特に画面右に長篠城、その下に鳶巣山砦の奇襲、そして連吾川を境に武田軍を右、連合軍を左に配す位置関係などが類似する。

一方で場面転換には名古屋市博本以降採用されなかった雲が描かれ、旧浦野家本にみる徳川家康の姿を隠す表現や、徳川美術館本にみる鉄砲発射時の黒煙などが取り入れられる。

独自の表現としては、足軽の数が増し、連合軍圧勝の表現から武田

軍の奮戦を強調した両軍混戦の様相へと変容した。

二 成瀬家本の特異性―名古屋市博本からの展開

「長篠合戦図屏風」は、名古屋市博本から東博本下絵に至る過程で、その図様に変化がみられる。

名古屋市博本は、鑑賞者とはほぼ同じ視点で連合軍の陣内をとらえ、金雲と山々の描写を幾重にも重ね、手前のモチーフを大きく、奥にくにつれ小さく描くことで遠近感をあらわす。その一例として、第二扇にみる徳川家康陣内の足輕を大きく、第四扇上部にみる小高い山の上に立つ足輕を小さく描く。同主題屏風の中では最も大きくあらわし、戦闘を主題にしているとは思えないほど穏やかな身振りである。部隊の特定については、第二扇中ほどにみる金扇の馬印から徳川家康を確認できる以外は難しい。これは逆に、徳川軍に焦点をあてているとみるべき表現である。

続く成瀬家本は合戦の全体像を六曲一隻で完結させ、名古屋市博本よりもやや上から俯瞰的にとらえ、金雲を排除する。そのため場面転換が曖昧となったが、結果的に第一扇にみる長篠城とその下にみる鳶巢山砦の奇襲、さらに第二扇上部の馬場信春最期の場面は、第三扇以降に展開される設楽原の合戦と異時同図であらわす。

本図にみる自然表現は、実景とどの程度近似するのか。湯浅大司氏によると、現在の設楽原の景観は近代以降完成したものであると指摘する。⁽²²⁾ 成瀬家本の画面上部に連なる雁峰山は、江戸時代以前は草刈山であり、若干数の樹木を残す程度であった。また、寛文七年（一六六七）にこの地の領主であった設楽政貞が、連吾川の中流であ

る現在の柳田橋付近に堰を設けたことで、本流がより東へ移ることとなった。しかし、昭和末期に行われた設楽原一帯の圃場整備により、現在は寛文以前の川筋に戻っている。

実際に現地を訪れて撮影したのが資料一である。成瀬家本の画面と比べると、正面奥に丸みのある小山を重ねるような形状の山並みが見え、復元された馬防柵の背後にも飛び出した丸山が確認できる。また、流路が戻った連吾川と復元された馬防柵の位置関係も含め、これらの配置や形状が類似する。絵師が実際に戦場を視察したと思えるほど、成瀬家本との共通点を見出すことができる。

一方の人物は、名古屋市博本から画面が半分に縮減されたため、名古屋市博本よりも所狭しと配される。そこでは武田軍が連合軍の銃撃に倒れゆく、まさにその光景を生々しくあらわしている。しかし、個々の人物は場違いなほど静的で、まるでスタンプを押したかのように動作に乏しい。攻めかかる武田軍を見ても、山県昌景の首を手にとり避する第三扇中ほどの志村又右衛門は、戦場の動作とはとても見えない（図8）。このように名古屋市博本から成瀬家本への展開は、視点を真横から上空へと移動することで俯瞰的に合戦の全体像をとらえ、金雲や遠近法を排除する一方で、実景を忠実に再現した画面を構築する。そこに配された人物は、連合軍が武田軍に圧勝する様を明確にあらわすものの、活発な戦闘表現には欠けるきらいがある。

このような上から貼り付けたかにみえる山川描写に関し、並木誠士氏は地図との関係について指摘された。⁽²³⁾ 確かに川の描写を比較すると、成瀬家本の連吾川と地図にみるそれとは、上流から下流に至るまで真上からとらえる描き方であり、明らかな類似性が認められる（図9）。そこで以下では実際の絵図と成瀬家本とを比較し、検討を試み



図8 山県の首を持つ志村又右衛門
(成瀬家本 第3扇中程)



資料1 設楽原古戦場跡

表：「長篠合戦図屏風」リスト

No.	作品名	時代	成瀬家本との関係	構図			地形	
				[人物：地形] 比率	俯瞰角度	成瀬家本と比較した 俯瞰角度	山	川
1	名古屋市博物館本	17世紀中	成瀬家本に構図が通じる	小：大	低(ほぼ真横)	低	増	同
2	成瀬家本(犬山城白帝文庫)	17世紀後	—	大：小	上	—	—	—
3	成瀬家副本(犬山城白帝文庫)	江戸後期	成瀬家本の副本	大：小	上	同	同	同
4	松浦家本	1826年	成瀬家本の写本	大：小	上	同	同	同
5	長浜城歴史博物館本	江戸後期	成瀬家本の写本	大：小	上	同	同	同
6	個人蔵本	江戸後期	成瀬家本の写本	大：小	上	やや低い	同	水量やや増
7	奥平神社本	江戸後期	成瀬家本の写本	大：小	上	同	同	同
8	東京国立博物館模本	江戸後期	成瀬家本の粉本	大：小	上	同	同	同
9	大阪城天守閣本	18世紀	成瀬家本の写本、一部改作	大：小	上	同	同	同
10	徳川美術館本	18世紀	成瀬家本の写本、一部改作	大：小	上	やや視点を引き高い	増	水量増
11	旧浦野家本(豊田市郷土資料館)	18世紀	成瀬家本の写本、一部改作	大：小	上	同	少	水量増
12	徳川美術館本	江戸後期	成瀬家本を中屏風に再構成	大：小	上	視点を引く	少	同
13	東京国立博物館下絵	19世紀	成瀬家本から発展	小：大	やや低	視点を引き低い	少	水量増

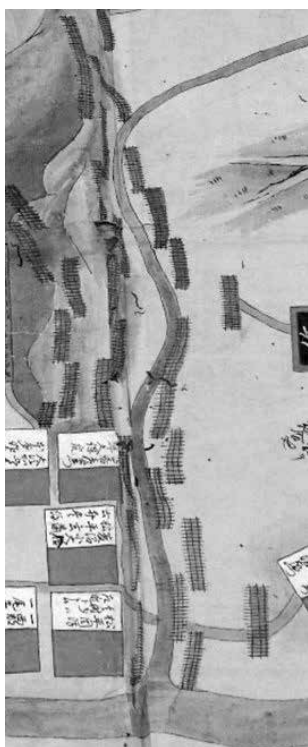


図9 連吾川の描写
右：成瀬家本(第4扇)
左：狩野文庫本

ていきたい。

絵図との関係で注目すべきは、武田側の史料『甲陽軍鑑』である。同書は、長篠合戦で老臣を失ったことに危機感を覚えた武田家臣高坂弾正忠昌信が、甥の春日惣二郎らの協力を得て口述筆記したものである。その後、死を目前にした惣二郎が知己の小幡光盛に譲渡し、それが大甥の景憲に渡ったとみられる。⁽²⁴⁾この小幡景憲は、武田家臣小幡昌盛の三男として生まれ、天正一〇年（一五八二）武田家滅亡後、徳川秀忠の小姓となる。その後、文禄四年（一五九五）に突如逐電し、諸国遍歴をしながら軍学を修めたという。⁽²⁵⁾しかし、関ヶ原合戦時には、浪人の身で井伊直政隊に加わり戦功を上げ、大坂冬の陣では前田利常隊に属して活躍し、夏の陣では諜報活動によって徳川勝利に貢献した。これらの功績から、再び將軍家に召し抱えられ一五〇〇石を領した。寛文三年（一六六三）九二歳の天寿を全うしたとされる。⁽²⁶⁾

景憲は、信玄の軍師とされる山本勘助の軍法を学んだ武田遺臣広瀬景房や早川幸豊に学び、徳川幕府の基本軍学とされた甲州流軍学を大成した。⁽²⁷⁾その講義にはたびたび絵図が用いられた。『甲陽軍鑑』では絵図の位置づけを次のように説く。

惣別、信玄公の合戦ハ、はたらきまへに、とりかけんとおもふ国の⁽²⁸⁾ゑづをもつて、各侍大將うちより、そのくにのけんなんの場をさたして、一の手・二の手・よこやり・わきぞなへ・うしろぞなへ・ここにだ奉行、所によりてまぼるはた・ゆふぐん・をさへせいなど、申すことハリ候て、そつじに、かけなどへころびおちる儀、いづかたにても、さのミこれなし。さやうにいたすを、甲州の軍法といふ。

『甲陽軍鑑』（本篇六）⁽²⁸⁾

△信玄公御出陣前に三ヶ条之ならしの事

- 一、第一に、其国の⁽²⁹⁾絵図を以て、内談之事。
 - 一、第二に、敵の人数積り、同きやうぢやく、内談之事。
 - 一、第三に、味方いさむるせいし、あらはしてさすべし。
- 三ヶ条共口伝多シ。

『甲陽軍鑑』（本篇十六）⁽²⁹⁾

前者は、武田信玄が合戦に臨む際、戦地となり得る場所の絵図を用いて地形等を正確に把握し、侵入経路や軍勢配備などの検討を行っていたと示す内容である。一方の後者は、出陣前に行われる「三ヶ条之ならし」で、信玄が絵図による軍議を重視したことを伝える。

甲州流軍学の教本とされた『甲陽軍鑑』末書下巻之下は、写本で遺存するものが多く、酒井憲二氏は「縦三〇センチを越す大本であり、多出する絵図に彩色を施す美本であることを特徴とする」⁽³⁰⁾と述べる。また、武田信玄の軍事・軍法は絵図を重視していることから、『甲陽軍鑑』の原本に絵図が付随していた可能性を黒田日出男氏も支持する。⁽³¹⁾

このような甲州流軍学の教育に寄与した絵図や陣立図は、江戸時代中期のものが多く、⁽³²⁾成瀬家本との比較に有効なものはいくつかない。

加えて現存する絵図は、地形や布陣を簡略的に描くものが多く、合戦図屏風制作にあたって十分な情報を得るには乏しい（図10）。

けれども、東北大学附属図書館狩野文庫に所蔵される「長篠合戦絵図」（以下、狩野文庫本）は、江戸時代中期の作とみられるが、小幡

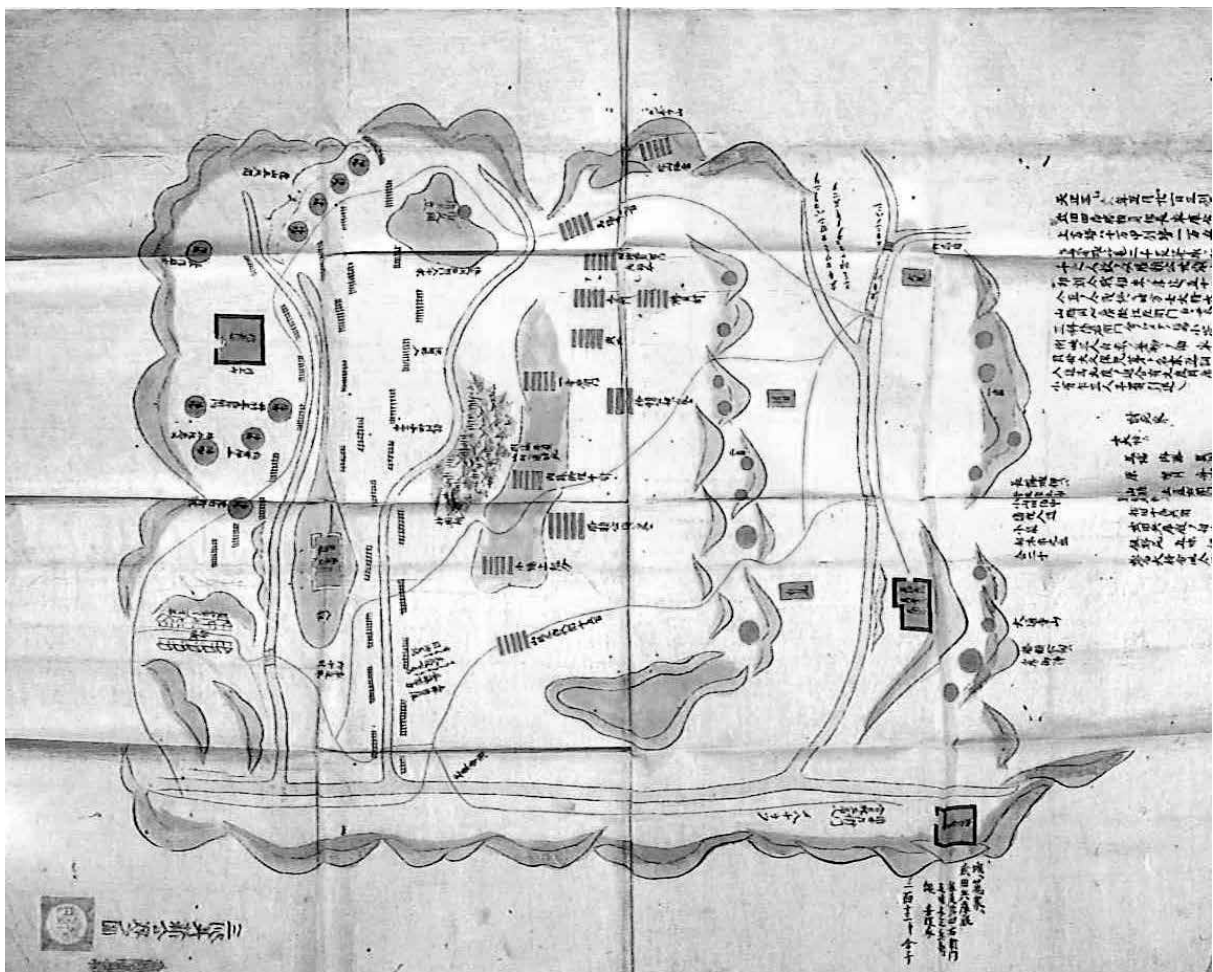


図 10 「三州長篠合戦図」 東北大学附属図書館 狩野文庫 江戸時代中期 紙本淡彩 61.5 × 79.0cm

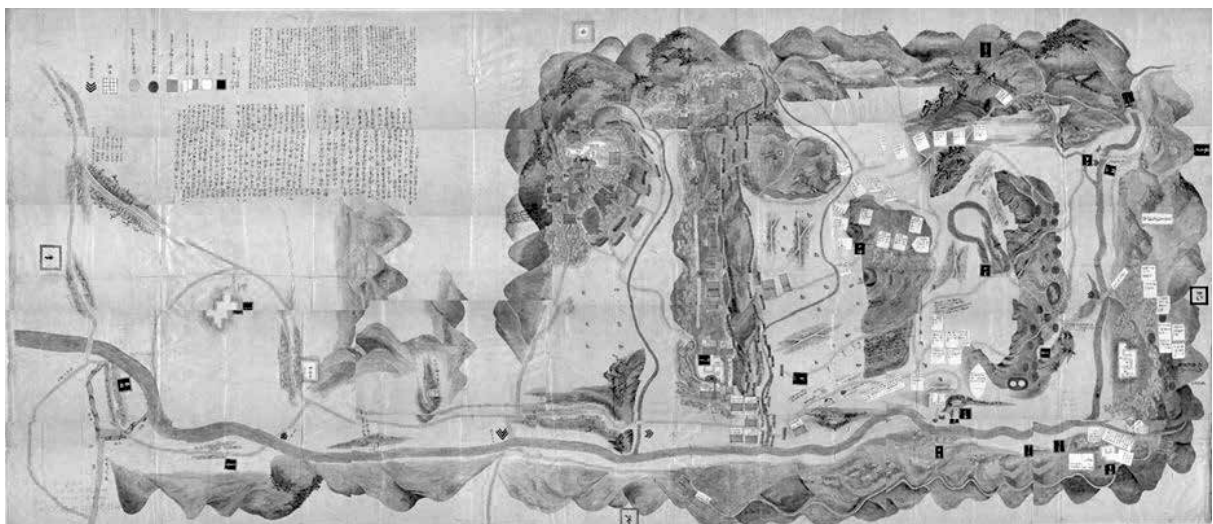


図 11 「長篠合戦之圖」 東北大学附属図書館 狩野文庫 江戸時代中期 紙本淡彩
185.0 × 411.3cm (筆者測定)

景憲正系の弟子である杉山家伝来の陣取図であり、景憲の識語が付されることから、一七世紀に景憲の下で制作された原本の内容を忠実に伝える絵図として、極めて重要な資料と位置づけられる⁽³⁵⁾（図11）。

その識語には、天正一〇年に徳川家康が武田家滅亡後の甲斐国に入国した際、長篠合戦参戦者である徳川譜代家臣と武田家家臣の両者から合戦の情報を収集し、実際に当地を訪れて検分の末、絵図に起こしたとある。また「但某不案内二候間繪圖之儀者可有相違モ不存候、」と記すように、景憲自身、細かな地形を把握しきれておらず、絵図の地形には誤りがある可能性を添えている。

しかし本図は類例のないほど巨大な紙面を用い、山川の配置や、武田軍を中心に各部隊の陣取を細かく書き留めているため、このような絵図からであれば、屏風を制作するにあたっても、十分な情報を得ることができたと考える。

三 成瀬家本と絵図―比較からみる共通性

狩野文庫本は、四方をそれぞれ正面にとらえた視点から山容を描く。しかし、「東」であるはずの方角を「北」と解するなど誤りも認められる。設楽原では、武田軍の布陣する山を明確に三分化し、連合軍の布陣も山上に配す。これらは成瀬家本と明らかに異なる点である。また、画面下部において横に流れていく豊川に対し、縦に流れる瀧川、連吾川、宮川は、それぞれほぼ直角に合流する。特に連吾川は、徳川家康陣前とその上部の小山の間で凹状となるが、成瀬家本では武田軍側へ凸状となる点で相違が認められる。寛文期の流路変更が影響していると考ええる。このほか画面内に施された注記や「田」など文字であ

らわしたモチーフ、建物の描写などは採用されていない。

しかしながら、細部のモチーフに注目すると、山の形状、岩や木々などの情報や位置関係に多くの類似点が認められる。

以下において、「山川の描写」と「部隊布陣の描写」に分け、成瀬家本と狩野文庫本とを比較分析し、その共通性や相違性を明らかにしていく。

1 山川の描写

成瀬家本の武田軍と徳川・織田連合軍の布陣を考慮し、同じ角度から狩野文庫本をとらえたのが図一二である。両者はともに画面右に長篠城を配し、そこにおける攻防戦、徳川軍酒井忠次隊による鳶巣山岩の奇襲を描く。山を挟んで第三扇以降で設楽原の戦場をあらわし、中央にみる連吾川を境に右手に武田軍、左手に徳川・織田連合軍を配す。このように構図においては多くの共通点を認めることができる（図12）。

成瀬家本第一扇の上部には、緑を基調に一部土色で岩肌をあらわした山々を、次々と重ねるように配す。その山頂部には松樹を加えて描く。樹幹の左右に葉叢を交互に描き、それらを二・三本寄せ集めて三角形のまとまりとする描法は、一七世紀前期制作の「関ヶ原合戦図屏風」（津軽屏風・大阪歴史博物館蔵）左隻第三扇、四扇下部などにもみえ、描法に通じるところがある。狩野文庫本では、青と灰色の淡彩で着色した山を重ねるように配し、墨で木々を描く（図13）。樹形は異なるが、その配置に共通性が認められる。草刈山であった合戦当時の光景をあらわしたものと推察する。

また、近くには滝がみえ、二ヶ所に橋が架かる。上部の橋は、橋面



図12 成瀬家本と狩野文庫本を同一角度からとらえたときの全図
上：成瀬家本 下：狩野文庫本

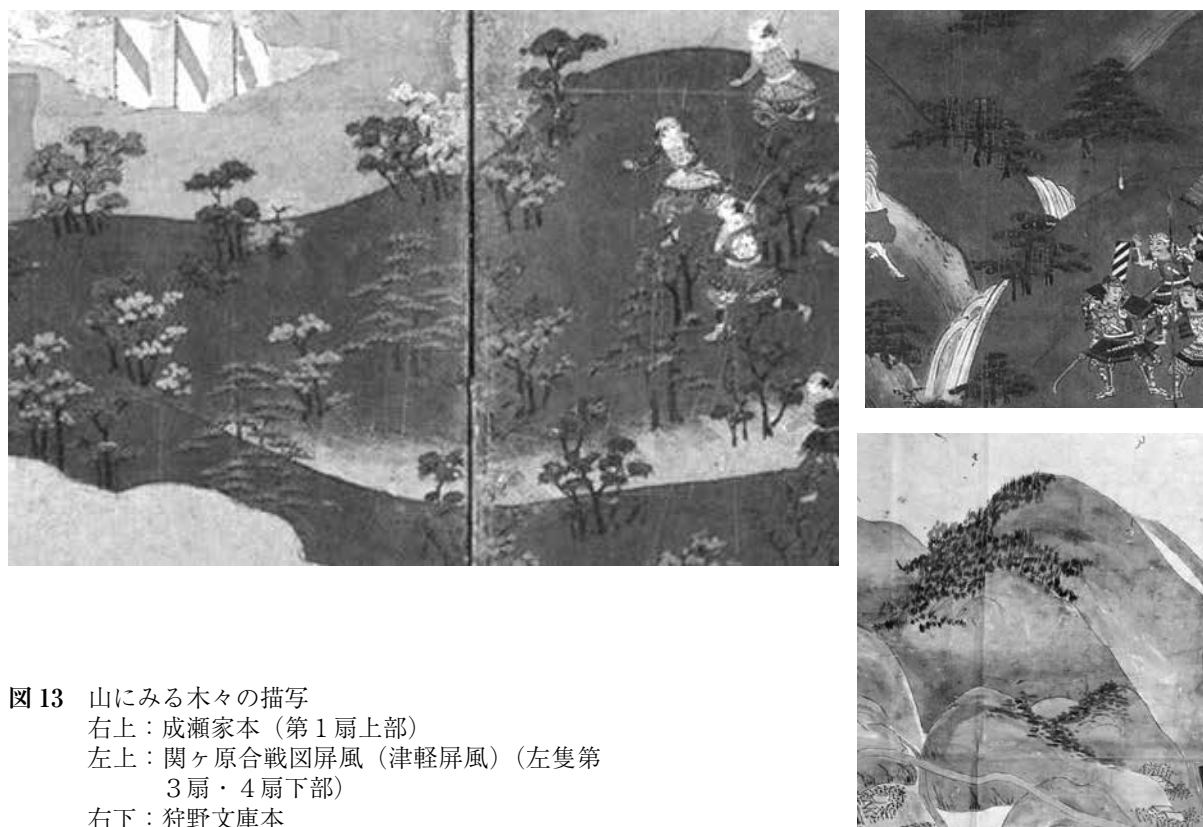


図13 山にみる木々の描写
右上：成瀬家本（第1扇上部）
左上：関ヶ原合戦図屏風（津軽屏風）（左隻第3扇・4扇下部）
右下：狩野文庫本

に少し濃墨を入れ、僅かにカーブする板状の描き方であり、一五世紀制作の芸阿弥筆「観瀑図」（根津美術館蔵）に通じる描写である。狩野文庫本でも同様の位置に杏子色を施した橋がみえ、「瀧川之昔ヨリノ橋」と注記される（図14）。

一方、その下第二扇上部の橋は土橋とみえ、歌川広重筆「木曾街道六拾九次之内 赤坂」などに通じる描写である（図15）。土橋は、数本の木でつくる主桁の上に横木を並べ、その上に土を盛る構造で、当時の橋の多くがこの工法でつくられた。本図においてもその形状を認めることができる。しかし狩野文庫本では、上流の橋ではみえない横線を橋面に施し、板橋風に描く。その近くに記す注記には、「合戦之時之さるはし」とある。猿橋とは、武田軍が長篠城から設楽原へ向かう際に利用した橋のひとつと考えられ、⁽³⁶⁾ 狩野文庫本の識語では、武田勝頼が利用したことを記す。このほか狩野文庫本では、さらに下に「いわしろの渡り」と記す板橋風の橋を描く。⁽³⁷⁾

橋下を流れる瀧川は、長篠城方面へ向かい、やがて大野川と合流し豊川となり、画面下を第六扇まで流れる。

その下、長篠城までの間は、土色に着色された岩山がみえる。狩野文庫本もここに山を配し、その裾野には岩溝を墨線であらわす（図16）。

さらに下へ移動すると第一扇の中ほどに長篠城がみえ、城門から大野川へ橋が架かる。狩野文庫本にこの橋はなく、城門と大野川の間にある一定の距離がある。橋の先では、第二扇にかけて鳶巣山と、そこに築かれた砦がある（図17）。

成瀬家本第二扇の上部には一扇と同様に山を連ね、屏風の外に続く空間を想像させるように、手前を小さく、奥を大きく描く。それぞれ

の山の形は丸みを帯びた三角形で、緑の所々に土色を施した切り込みを入れ、岩溝をあらわす。これらのモチーフの表現は、狩野文庫本も同様である（図18）。

第二扇には、長篠城と設楽原の主戦場を分ける山々を配す。成瀬家本の画面においては最も山が集中し、その山間部に武田勝頼を配すことから、これらが狩野文庫本における勝頼陣所の山に相当するとわかる（図19）。

それぞれの山の描法にも注目する。成瀬家本にみる山々は、裾野部分を土色にして岸壁をあらわし、そこから山頂部にかけて緑色で山林を表現する。裾野部分に岩や崖などをあらわすのは狩野文庫本も同様で、平面的ではあるが裾野は岸壁で、山頂に近づくにつれ緑の淡彩で山林をあらわす（図20）。このように、モチーフの配置や色彩の傾向に両者の共通性が認められる。

第三扇の上部は、一列に進軍する武田軍に沿う形で横長の山を配し、狩野文庫本も同位置に確認できるものの、山道の描写を追加する（図21）。

第三扇の中ほどは一転して平地が多く、黒母衣をまとった武田信豊隊が陣取る部分にのみ山を描く。一方狩野文庫本は、この位置一帯に山を配し、所々進軍に使用した道を描く（図22）。

第三扇の下部にみる馬場信春の姿を隠す山や、豊川に沿う山々は、狩野文庫本には確認できない。

第四扇は狩野文庫本に類似する描写で、馬防柵に沿い連吾川が流れる。その中ほどには、馬防柵を割って武田軍側に押し出る小山があり、これも狩野文庫本において丸みを帯びた形状と配置に同様の特徴が認められる（図23）。



図 14 橋の描写
 右上：成瀬家本（第1扇上部）
 左上：芸阿弥筆「観瀑図」（根津美術館蔵）部分
 右下：狩野文庫本

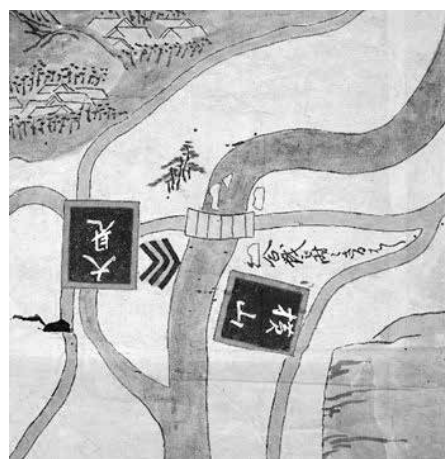
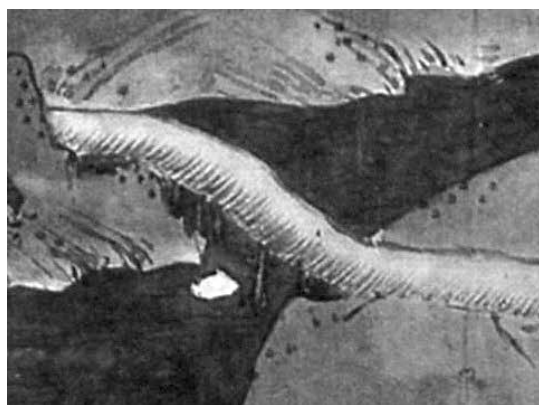


図 15 橋の描写
 右上：成瀬家本（第2扇上部）
 左上：歌川広重「木曾街道六拾九次之内 赤坂」
 右下：狩野文庫本

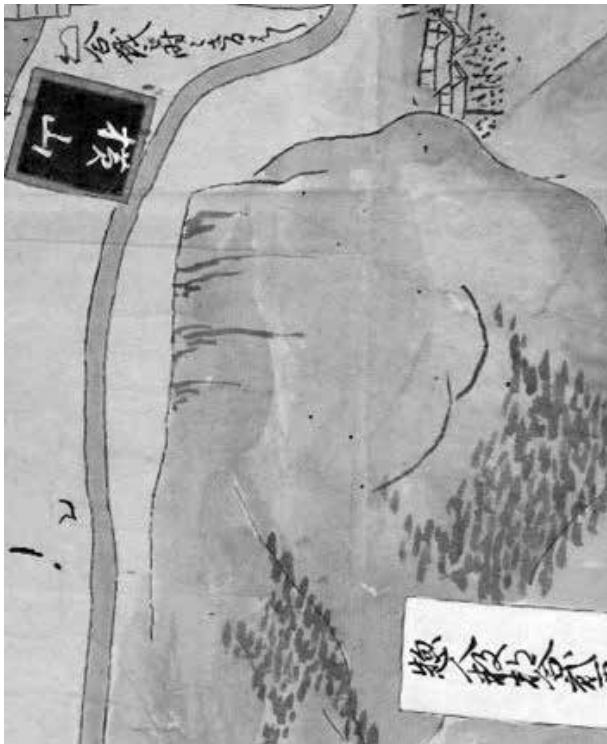


図16 岩の描写
右：成瀬家本（第2扇上部） 左：狩野文庫本



図17 長篠城と鳶巣山砦奇襲
右：成瀬家本（第1扇下部） 左：狩野文庫本



図 18 山の描写
左：成瀬家本（第2扇上部） 右：狩野文庫本



図 20 武田軍中央柳田付近の山の描写
上：成瀬家本（第2扇中程）
下：狩野文庫



図 19 武田勝頼陣所の山
右：成瀬家本（第2扇中程） 左：狩野文庫本

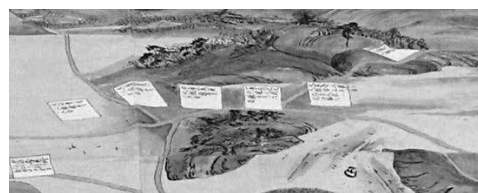


図 22 武田軍前備え
右：成瀬家本（第3扇中程） 左：狩野文庫本

図 21 武田軍右翼土屋隊付近の山の描写
上：成瀬家本（第3扇上部）
下：狩野文庫

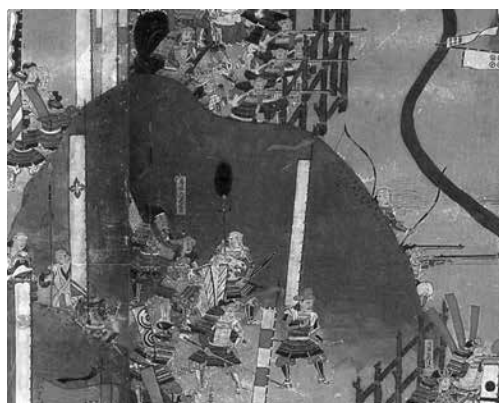


図 23 連合軍左翼に配す山
右：成瀬家本（第4扇上部） 左：狩野文庫本

第五扇は、連合軍の前備えをあらわす。上部にみる織田軍前田利家隊・佐々成政隊と、下部にみる徳川家康隊を分けるように山を配し、そのほかは平地である。一方狩野文庫本では、すべての前備えを山上に配置する。

第六扇の上部は、狩野文庫本と同様に丸みを帯びた三角形の山を重ねる。その下の平地には織田信長や織田信忠が確認できるが、狩野文庫本はこれらを山上に描く(図24)。

一方、信長陣営の前を流れる宮川を下流にいくと、岩溝が施された山を確認できるが、これは狩野文庫本にもみえ、墨線を用いて岩溝をあらわす(図25)。

このほか、画面上部に

第一扇から六扇に至るまで連なる山は、第二扇と第五扇、六扇の山を凸状に、第三扇、四扇の山を凹状にする位置関係は、狩野文庫本と近似する(図26)。

ここまで成瀬家本と狩野文庫本の自然表現を照合してきた。その結果、山容や川筋の多くに類似性が認められる。しかし、松樹の形状や板橋風の橋など相違点もいくつか散見された。これは狩野文庫本以外の絵図の介入があったことを示している。出羽庄内藩酒井家に伝わる「長篠合戦絵図」(致道博物館蔵)は、東西南北の誤りや山容、川筋などが狩野文庫本に共通する絵図である(図27)。山の形状や細部のモチーフなどが狩野文庫本と比べやや簡略化されているが、松樹を成瀬家本と比べると、樹形などに類似性が認められる(図28)。しかし、橋に関しては本図も板橋風である。このほかにも狩野文庫本に類する絵図が制作され、それらが成瀬家本制作に寄与したと推察する。

また、成瀬家本の画面右に配す瀧川は、連吾川や宮川と異なり、水流を上流から下流にかけて段々に立体感をもつ描き方をする。このような絵画的要素と絵図的要素が混在するところに本図の特徴をとらえることができる。

成瀬家本の図様を構想するにあたり、実景と近似する地形表現を求めた所以はなにか。多くの戦国合戦図は、先祖の武功を視覚化し、自家の身分保証に繋げることを意図した⁽³⁸⁾。そのため、画面内であらわす先祖の姿は、武勇を表象しつつも現実感を伴わなければならなかったのである。実景を忠実に写すことで在地性を付与し、過去にあそこの、あの場所で起こったいくさで先祖が活躍したという現実味を持たせる効果を求めたと考える。

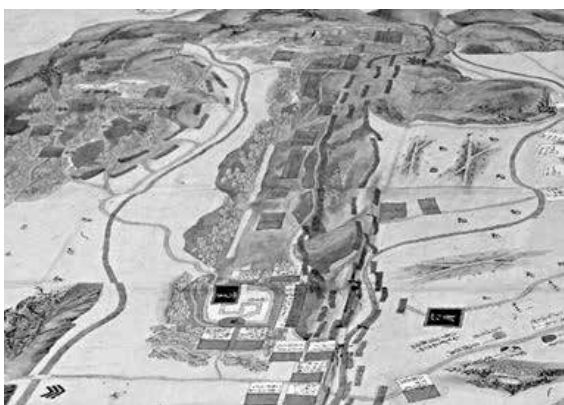


図 24 連合軍付近の山の配置
右：成瀬家本（第5・6扇）
左：狩野文庫本



図 25 岩山の配置 右：成瀬家本（第6扇下部） 左：狩野文庫本

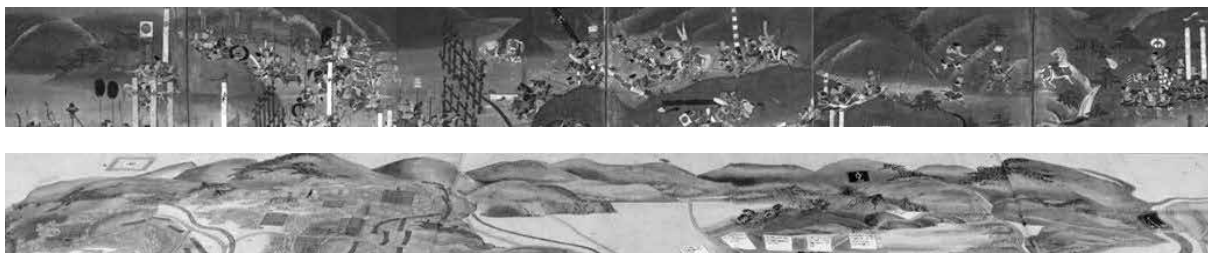


図 26 画面上部山の比較 上：成瀬家本（第1扇～6扇上部） 下：狩野文庫本



図 27 「長篠合戦絵図」致道博物館 紙本淡彩 176.0 × 93.0cm



図 28 松樹の比較
右：成瀬家本（第1扇上部） 左：致道博物館本

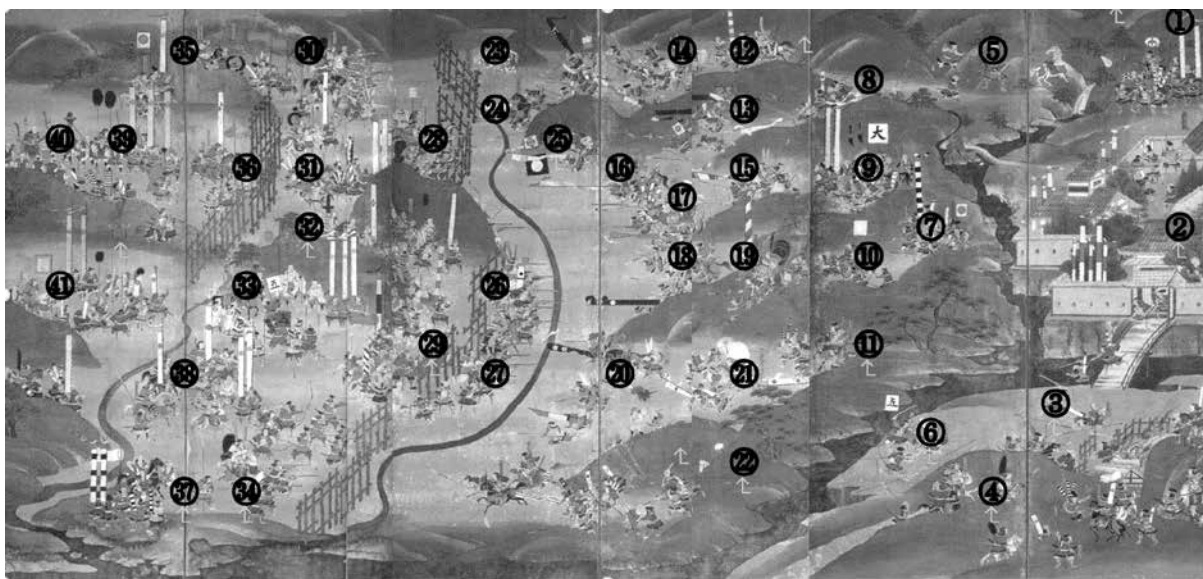
2 部隊布陣の描写（資料二）

成瀬家本第一扇の上部には、穴山梅雪隊を配す。狩野文庫本ではそこから川を渡った設楽原方面に配すが、両者の位置に大きな変更はない。

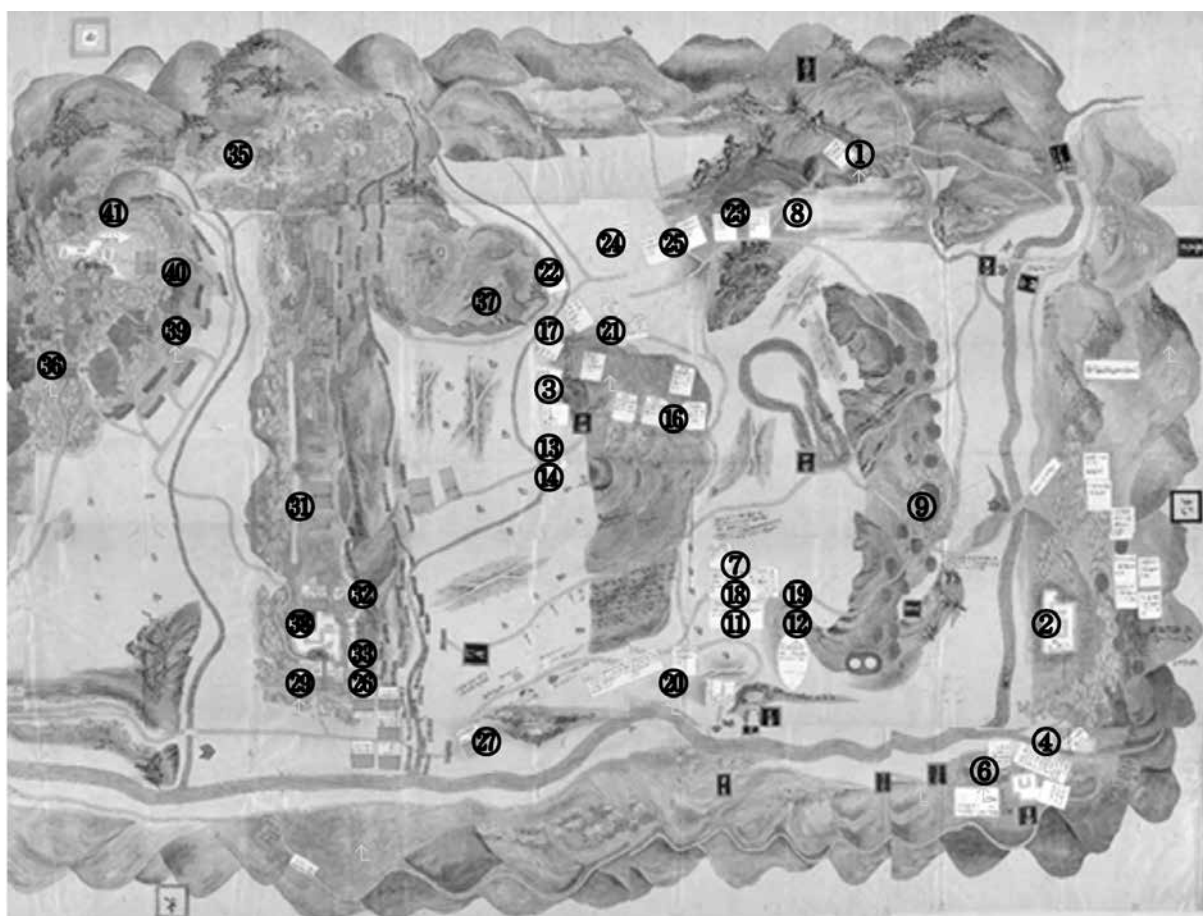
第一扇の下部は二扇にわたり、酒井忠次隊による鳶巣山砦奇襲を機に、奥平貞昌の指揮の下、長篠城から城兵が討って出る様子を描く。しかし狩野文庫本では、酒井隊を長篠城側に配し、大野川を挟んで武田軍名和宗安らと対峙する様子をみせる（図29）。成瀬家本において城門から架けられた橋は狩野文庫本にはなく、長篠城と大野川の間には一定の距離がある。また、狩野文庫本では、この場面で戦死するはずの和田業繁を武田軍前備えに配している。

第二扇の上部には、馬場信春の最期を小高い丘のうえに描く。『甲陽軍鑑』によれば、「馬場美濃殿ハ、のけばのきたまへ共、ながしのはしは二て、少あとへ返し、たかき所にあがり、」名乗りを上げたとあり、狩野文庫本ではそのとき使用した道のみを描く。その山道は、小高い山を通り抜けることから、馬場を配すべき位置関係は適切である（図30）。その下には狩野文庫本と同位置に一条信龍隊がみえる。

第二扇の中ほどには、狩野文庫本と同位置に



1. 穴山 2. 奥平 3. 和田 4. 酒井 5. 馬場 6. 名和 7. 跡部 8. 一条 9. 勝頼 10. 初鹿 11. 小山田
 12. 甘利 13. 安中 14. 内藤 (昌) 15. 横田 16. 望月 17. 原 18. 小幡 19. 信豊 20. 山県 21. 信廉
 22. 馬場 23. 土屋 24. 真田 (昌) 25. 真田 (信) 26. 内藤 (信) 27. 大久保 28. 佐々・前田 29. 本多
 30. 福富 31. 滝川・蜂須賀 32. 石川 33. 家康 34. 植村 35. 秀吉 36. 柴田 37. 佐久間
 38. 榊原・信康・水野 39. 稲葉 40. 信長 41. 信忠



資料2 両軍の配陣

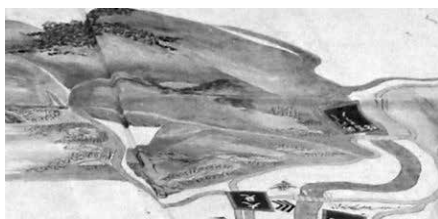


図30 馬場信春最期の場面
上：成瀬家本（第2扇上部）
下：狩野文庫本



図29 長篠城と諸隊の位置関係
右：成瀬家本（第1扇下部）
左：狩野文庫本



図31 勝頼陣所と跡部 小山田隊布陣
右：成瀬家本（第2扇中程）
左：狩野文庫本

武田勝頼を配す。ひと山下に移ると跡部勝資隊がみえる。狩野文庫本では勝頼陣所よりやや戦場方面へ移動するが、左翼部に位置する点は一致する。さらに下へ移ると、松のそばに小山田信茂隊が確認でき、狩野文庫本とも同位置である（図31）。

第三扇の上部、武田軍の右翼には、内藤昌豊隊、甘利信康隊を配す。狩野文庫本では内藤隊を中央の最前線、甘利隊を武田軍の左翼に配す（図32）。ひと山下に移ると、第三扇の中ほどには安中左近、横田十郎兵衛、望月重氏、原昌胤、小幡信貞、武田信豊らの部隊がみえる。狩野文庫本でもほぼ同位置であるが、このうち小幡隊と信豊隊は左翼にみえる（図33）。

第三扇の下部には、山県昌景の首を手にする志村又右衛門と、その後方に白母衣をまとった武田信廉隊がみえる。狩野文庫本において、信廉は中央の前備えにあり、配置が異なる。さらに下には、山に隠れた姿で馬場信春がみえるが、狩野文庫本では武田軍の右翼に配す（図34）。

第四扇の上部には、白馬から落馬する土屋昌次、その下真田昌輝隊、真田信綱隊がみえる。狩野文庫本では武田軍右翼において一列



図 32 武田軍右翼土屋隊 上：成瀬家本（第3・4扇上部） 下：狩野文庫本

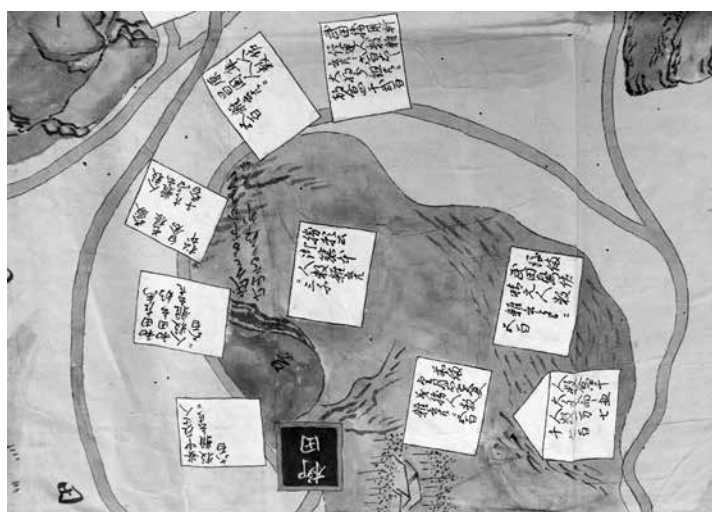


図 33 望月、原隊
右：成瀬家本（第3扇中程）
左：狩野文庫本



図 34 馬場隊と信康隊の配置
右：成瀬家本（第3扇下部） 左：狩野文庫本

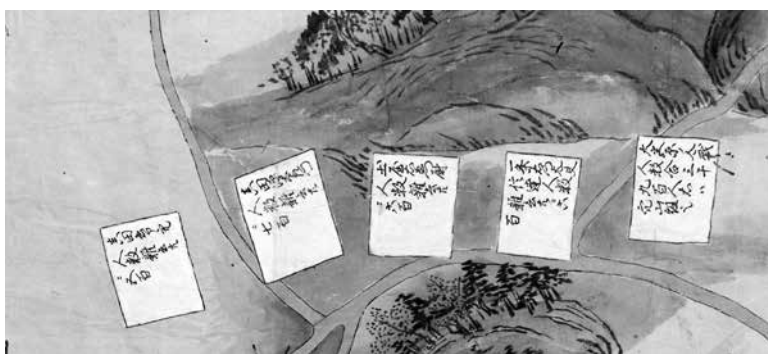


図 35 土屋隊と真田隊の配置
右：成瀬家本（第4扇上部） 左：狩野文庫本

に進軍する様子で描かれるが、配置は一致する（図 35）。

第四扇の中ほどは、一転して連合軍徳川陣営である。狩野文庫本では、大久保隊を馬防柵の外に配すほか、内藤信成、大久保兄弟、本多忠勝の各部隊が家康本陣を囲むように布陣する。全体の位置関係に大きな違いはない（図 36）。

第五扇の上部には、羽柴秀吉隊を配し、中ほどには滝川一益、柴田勝家、石川数正隊が布陣する。このうち柴田隊は、狩野文庫本では織田信長陣所の後方にみえる。

第五扇の下部には、狩野文庫本と同様の位置に徳川家康の陣営がみえる。しかし、その下に配された長槍を持つ佐久間信盛は、狩野文庫本において連合軍左翼の飛び出た小山に布陣し、配置が大きく異なる（図 37）。

第六扇の上部には、織田信長の陣営がみえ、ひと山下に移ると織田信忠の部隊が布陣する。狩野文庫本では信忠の位置に柴田隊が配され、信忠隊は信長陣所の左翼に布陣する（図 38）。

3 成瀬家本の成立―絵図から屏風へ

成瀬家本の山川は、狩野文庫本に類する絵図から情報を取得し、人物との関係で調整を図りつつ配された。本来であれば金雲が果たす場面転換の役目を、成瀬家本では山川が担う。長篠城の攻防戦と設楽原の戦場の間には多くの山川が配され、馬場信春最期の場面も、山を挟むことで場面転換が図られた。設楽原の戦場における武田軍は、第三扇の下部に一番手山県景景隊、二番手武田信康隊、第三扇の中ほどに三番手小幡信貞隊、四番手武田信豊隊、第三扇の上部に土屋昌次隊、内藤昌豊隊を配し、それぞれの間に山を描く。



図 36 徳川軍配置 右：成瀬家本（第4扇中程） 左：狩野文庫本

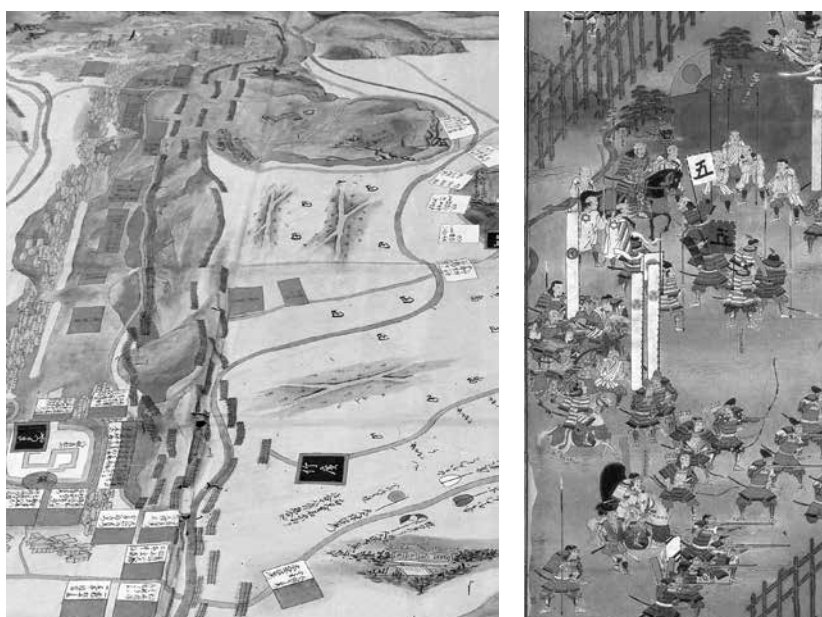


図 37 佐久間信盛の配置 右：成瀬家本（第5扇下部） 左：狩野文庫本



図 38 右：成瀬家本（第6扇上部） 左：狩野文庫本
（成瀬家本は信長前方に柴田、右方に信忠であるが、狩野文庫本は右方柴田、左方信忠となっている。）



図 40 連合軍前衛
大和侍 寄合衆 (狩野文庫本)



図 39 武田軍諸將
成瀬家本 (第3扇下部)

また、これらの山は異時同図の指標となっている。第三扇の下部、松のそばにみる馬場信春が姿を隠す理由については、武田軍の諸將と合わせて検討すると明らかにになる。一番手山県昌景が討死を遂げたため、山県隊は壊滅状態となるものの、その後方から白母衣をまとう二番手武田信廉隊が臨戦態勢で現れる⁽⁴¹⁾。山を越えたその上には、三番手赤の旗指物をつけた小幡信貞隊、黒母衣をまとう四番手武田信豊隊がみえ、小幡隊の後方に控える信豊隊は、まさに山に登る状況である。五番手馬場信春隊は、戦場に到着する前の姿をしている(図39)。このように五番手馬場信春の姿を隠すのは、それぞれの部隊の位置を考慮して時間的推移をあらわした結果である。この点で成瀬家本は、絵画としての劇的な表現を採用している。

その一方、武田軍内藤昌豊隊、甘利信康隊、武田信廉隊、和田業繁隊、馬場信春隊、連合軍佐久間信盛隊、柴田勝家隊、織田信忠隊などの配置は狩野文庫本と異なり、各部隊の布陣に『甲陽軍鑑』以外の情報が反映されたことは明らかである。さらに狩野文庫本は、織田軍の布陣を「大和侍」や「寄合衆」などと、部隊名を省略する傾向が認められる(図40)。識語文によれば、絵図の制作にあたり合戦の情報を取材した先が徳川家と武田家の家臣に限られたとあり、織田軍の部隊における位置関係が明瞭でないのはそれゆえである。このような情報不足が、『甫庵信長記』など他のテキストの介入を必要とした所以である⁽⁴²⁾。

成瀬家本を描くに際し、地形などテキストの文脈だけでは把握しきれない情報を『甲陽軍鑑』付属の絵図に求め、それを基に『甫庵信長記』などの諸史料から各布陣の情報を集めることで、成瀬家本の図様が完成したと考える⁽⁴³⁾。

おわりに

「長篠合戦図屏風」は、江戸時代を通して制作され続けた主題であった。このうち成瀬家本は、名古屋市博本のような一雙で長篠合戦を表現した屏風絵を一隻で完結させる形で成立し、その後旧浦野家本、徳川美術館本、東博本下絵へと模写されていく。その過程でモチーフや画面の改変がなされても、成瀬家本の構図は基本的に踏襲された。

本稿は、成瀬家本の図様がどの程度絵図に近似するのかわという問題について、狩野文庫本との比較を通して分析した。その結果、両者は山川の描写や位置関係に多くの共通点を見出せ、テキストには言及されていない木々や岸壁など、細部のモチーフの多くを引用していると認められた。

これまで軍書というテキストのみからその成立が論じられてきたが、絵図の関与が明らかになったことで、「テキスト＋絵」という別の性格を有する屏風の姿が浮かび上がってきた。成瀬家本制作時には、『甲陽軍鑑』や『甫庵信長記』をはじめ、様々な書物や絵図類が多数用いられ、それらを組み合わせる図様が形成されたと推察する。

最後に、軍書と絵図のどちらが先行するのかわという点を改めて考えたい。本来ならば、絵図にはすでに実景と布陣の情報が付されているため、わざわざ軍書に戻る必要はない。しかし、第三章でみてきたように、絵図では各部隊の布陣や絵画表現を施す情報が乏しいため、軍書に立ち返って補填する必要があったと考える。

これを踏まえ、次回は成瀬家本の人物表現に焦点を当てる。戦国合

戦図では、戦場における武勇を表象する傾向がある。これは成瀬家本も例外ではなく、鳶巣山砦奇襲策を臆することなく進言する酒井忠次や、主君である武田勝頼を逃した後、潔く敵軍に討たれる馬場信春など、画面内では武将たちの勇姿が光る。そして、その中心で展開されるのは、連合軍の矢玉に臆することなく突撃する武田軍の諸将である。これらは『甲陽軍鑑』において、特に強調される場面である。『甲陽軍鑑』や『甫庵信長記』などの軍書は、寛文期（一六六一―一七三）に最盛期を迎える。⁽⁴⁾ 成瀬家本の制作年が延宝期（一六七三―一八二）とみられることから、⁽⁴⁵⁾ 両者の繋がりを検討する必要がある。この点について、「武勇の絵画化」という観点から別稿を用意する。

注

- (1) 高橋修氏は「戦国合戦図」を既存の〈風俗図〉や〈物語図〉の様式とは違う性格を有すると指摘し、〈戦国合戦図〉という新たな一項を立てて把握すべきであると提唱した（高橋修『概説』戦国合戦図屏風の世界）和歌山県立博物館編『戦国合戦図屏風の世界』（一九九七年）。これを受けた原史彦氏もその妥当性を了解している（原史彦「長篠・長久手合戦図屏風の製作背景」徳川黎明会編『金鯢叢書』三六編（思文閣出版、二〇一〇年））。
- (2) 前掲註一、高橋。高橋修『図説・戦国合戦図屏風』（学習研究社、二〇〇二年）、一〇六―一〇七頁。
- (3) 前掲註二、高橋、一〇六―一〇七頁。
- (4) 高橋修『総論』長篠・長久手合戦図屏風』金子拓編『長篠合戦いくさの記憶』（勉誠出版、二〇一八年）。
- (5) 並木誠士「合戦図屏風」愛知県史編さん委員会編『愛知県史』（別冊 文化財二 絵画）（愛知県、二〇一一年）。
- (6) 現在、犬山城白帝文庫所蔵。
- (7) 内田九州男「長篠合戦図屏風について―両軍配備と文献―」桑田忠親『普及版 戦国合戦絵屏風集成 第一巻 川中島合戦図 長篠合戦図』（中央公論社、一九八八年）。
- (8) 宮島新一「川中島合戦図と長篠合戦図」桑田忠親『普及版 戦国合戦絵屏風集成 第一巻 川中島合戦図 長篠合戦図』（中央公論社、一九八八年）。

- (9) 和歌山県立博物館編『戦国合戦図屏風の世界』（一九九七年）、長篠・小牧長久手合戦図屏風（副本）解説。
- (10) 前掲註五、並木。
- (11) 本稿において『信長公記』は、奥野高広・岩沢愿彦校注『信長公記』（角川文庫、一九六九年）、ならびに太田牛一著・中川太古訳『現代語訳 信長公記』（KADOKAWA、二〇一三年）を参照した。
- (12) 「新旧の戦術を用いた決戦」という長篠合戦の評価について、平山優氏は『長篠合戦と武田勝頼』（吉川弘文館、二〇一四年）において、参謀本部編『日本戦史・長篠役』の影響を指摘する。これに対し藤本正行氏は『再検証 長篠の戦い』（洋泉社、二〇一五年）において『近世日本国民史・織田氏時代』の影響を指摘する。
- (13) 宝永二年（一七〇五）に成立した『四戦紀聞』は、徳川家康前半生における重要ないくさとして、姉川、三方原、長篠、長久手の四戦をあげる（和歌山県立博物館編『戦国合戦図屏風の世界』（一九九七年）、「姉川合戦図屏風」解説）。金子拓『鳥居強右衛門―語り継がれる武士の魂』（平凡社、二〇一八年）など。
- (14) 原史彦氏は、成瀬家本長篠合戦図屏風が本多家周辺で制作された原本を写した図様であると指摘する（原史彦「長篠・長久手合戦図屏風の製作背景」徳川黎明会編『金鯢叢書』三六編（思文閣出版、二〇一〇年）、原史彦「奥道具としての「長篠長久手合戦図屏風」」（徳川美術館編『合戦図―ものふたちの勇姿を描く―』（二〇一九年）。名古屋市博本から成瀬家本への図様の变化が大きいため、その間にも作品が介在することは充分に考えられるが、本稿では成瀬家本の制作意図という点で、『大猷公記』が示す内容を取り上げた。また、制作年代については、樹木や人物の描き方から、延宝期頃（一六七三〜八一）の制作と推定される（前掲註八、宮島）。筆者も成瀬家本の松樹の表現は、狩野探幽や常信に近いとみるため、『大猷公記』が示す年代には疑問を持つ。この点は、尾張藩の御用絵師が常信の下に画技を学びに行っていることから（吉田俊英「尾張の絵画史研究」（清文堂出版、二〇〇八年）。）、そのあたりの検証を今後行ないたい。
- (15) 湯浅大司「豊田市郷土資料館蔵「長篠合戦図屏風」」金子拓編『長篠合戦いくさの記憶』（勉誠出版、二〇一八年）。
- (16) 藤本正行『再検証長篠の戦い』（洋泉社、二〇一五年）、一五四―一五七頁。
- (17) 原史彦「長篠・長久手合戦図屏風の製作背景」徳川黎明会編『金鯢叢書』三六編（思文閣出版、二〇一〇年）。
- (18) 前掲註五、並木。
- (19) 薄田大輔氏は「合戦図の系譜と戦国合戦図」（徳川美術館編『合戦図―もの

- のふたちの勇姿を描く―」（二〇一九年）の中で、口髭を武者絵との関係で考察された。
- (20) 林美一「時代風俗考証事典」（河出書房新社、一九九九年）。
- (21) 狩野晴川院養信著『公用日記』天保五年二月廿九日条。金子拓「東京国立博物館所蔵長篠合戦図屏風について」東京大学史料編纂所附属画像史料解析センター通信 第七一号（二〇一五年）。
- (22) 湯浅大司「長篠・設楽原古戦場論」金子拓編『長篠合戦いくさの記憶』（勉誠出版、二〇一八年）。
- (23) 前掲註五、並木。
- (24) 小幡光盛の兄虎盛の孫が景憲である。
- (25) 吉田豊編訳『甲陽軍鑑』（徳間書店、一九七一年）、三頁。
- (26) 高柳光寿（ほか）編『寛政重修諸家譜』第九（統群書類従完成会、一九六五年）、一九五―二〇三頁。峰岸純夫・片桐昭彦編『戦国武将合戦事典』（吉川弘文館、二〇〇五年）、五七一頁。
- (27) 前掲註二六、高柳。峰岸・片桐。
- (28) 本稿において『甲陽軍鑑』は、酒井憲二『甲陽軍鑑大成』（汲古書院、一九九四年）を参照した。『甲陽軍鑑』（本篇・巻六）、一六三頁。
- (29) 前掲註二八、酒井『甲陽軍鑑大成』（本篇・巻十六）、一〇頁。
- (30) 酒井憲二『甲陽軍鑑大成』（研究篇（汲古書院、一九九四年）、一二六頁。
- (31) 黒田日出男『甲陽軍鑑』の史料論―武田信玄の国家構想』（校倉書房、二〇一五年）、三一頁。
- (32) 「風林火山 信玄・謙信、そして伝説の軍師」NHK、二〇〇七年、高橋修「一七九 信州川中島図」解説。
- (33) 狩野文庫には、杉山家伝来の史料がまとまって所蔵されている。狩野享吉の居宅が雑司ヶ谷にあり、小幡景憲や杉山盛政の墓所が雑司が谷の法明寺であることから、そのあたりで繋がった可能性が考えられる（前掲註三二、高橋）。『甲陽軍鑑』には、杉山八蔵公憲（盛政嫡男）による天和二年（一六八二）の清書本がある。奥に小幡景憲直伝であることを強調する識語があり、杉山本は景憲伝領の原本の姿をかなり忠実に伝えていると酒井氏は推察する（前掲註三〇、酒井『甲陽軍鑑』（研究篇）、二六頁）。狩野文庫本は「杉山八蔵憲長」（公憲嫡孫）の署名があることから一八世紀の作とみられるが、絵図に記された識語文は、小幡勘兵衛景憲の解説を忠実に写している。
- (34) 以下、識語文の翻刻である。

参河國長篠合戦繪圖

天正三年（乙亥）五月廿一日

卯刻半ニ合戦初、未
半ニ合戦終、

七枚ノ圖内

杉山八蔵

憲長

天文十一寅極月廿八日御誕生晋卦

権現様 于時三十四歳

三郎様 于時十七歳

信長公 于時四十二歳 蠱卦

信忠公 于時二十歳

勝頼公 于時三十歳

秀吉公 于時三十九歳

一 正業寺前之合戦拾八度者山縣自身之旗本ニ而拾三

度也、山縣討死シテ後小山田兵衛尉信茂兩度、跡部大炊之助一度、甘利

衆一度、小幡上総守信貞一度合拾八度之合戦也、

二 竹廣ニテ合戦拾九度者山縣相備衆拾三度也、拾三度

目ニ相備衆ヲ引揚トテ竹廣ニテ山縣三郎兵衛手負討

死ス、其後典厩組之侍衆尤甲州流ニ一備ヲ陰陽之二手ニ

分テ其内一手宛者竹廣之 家康公御旗本ヲ押ユルトテ懸

テ合戦する、小山田衆兩度、小幡左衛門督信秀一度、跡部

大炊之助衆一度、甘利衆一度、望月殿一度、望月殿勝頼公

前備也、付山縣モ典厩組也、合拾九度之合戦也、

三 柳田ニテ勝用軒組衆六度之合戦也、

長篠城押之内諸我入道勝頼公之御前エ参り城

卷ホグシ可申哉ト申上ル、罷歸卷ホグシ候ヘト御申候、

時先ニテ御討死ヲモ不存候ト申テ御供仕猿橋ヲ勝頼公

御越被成ヲ見テ歸テ城ヲ卷ホグス、其時城ヨリ出テ喰留ル、香坂源五郎

殿ニテ合戦シテ敵九八郎ヲ城内エ追入

三ヶ所手負討死ス、但頸ヲ揚テ戻又三河西郷之松平

主殿百五拾計ニテ岩城之瀬ヲ越テ喰留ル、小山田備中守

昌行衆合戦シテ一騎一人モ不残上下□ニ主殿ヲ討取、

此合戦一度有、右城押之衆兩度之合戦也、

五ニ 大宮前ニテ合戦九度者馬場美濃守一度真田兵部佐

兩度之合戦ニ初合戦ニハ頸拾六討取内兵部佐貳取、

是一重目之尺之木之内エ追込テ如此也、真田源太左衛門

六 一度、土屋右衛門督四度、一條右衛門太夫殿一度合九度之合戦也、
鷗巢ニテ四度之合戦

都合 合戦之場数五拾八度也、付タリ旗本

三百騎余討死シテ勝頼公ヲ堅固退ケ

申候、勝頼公猿橋迄者願儀ニテ引請、

右之段々者 家康公 天下正拾年甲斐國

御入國之時廣瀬・三科兩人ヲ被召出、則兩人ニ

御加増貳百貫宛被下、又酒井左衛門殿・石川伯耆守

殿・大久保七郎右衛門殿・同舍弟次左衛門殿御引合敵

味方之様子悉被 仰出候ヲ某勘兵衛・廣瀬

其外各所々ニテノ手ニ逢タル衆ニ承合、戦場エ

参候而見申候ニ毛頭無相違候、但某不案

内ニ候間繪圖之儀者可有相違モ不存候、

右正業寺前之合戦拾八度者大久保七郎右衛門

同舍弟次右衛門兩人ニテ被仕也、

□河の渡或ハ橋

□古城

○信長公方之陣城是ニテ見定

○勝頼公方之陣城是ニ而見定

□信長公方之備是ニテ見定

□権現様方之備是ニテ見定

□勝頼方之備是ニテ見定

□所ハ是ニ而見定

右八ツの様子ハ早ク備・陣取

各合点参様ニトテ如此、

一 勝頼公先衆馬場美濃七百之人数ニ二分先三

百五拾之備ヲ以テ佐久間衆ヲ追崩四拾三人打捕、

其内四騎ハ侍也、刀脇指或ハ指物ヲ添テ高名仕

尺之木外ニテ如斯、

二 佐久間右衛門旗ヲ為立塚江馬場美濃登リテ山

路之抛旗ヲ押立初働而人数ヲ早々引取後ニ

置テ新手参百五拾ヲ以テ備タリ、

三 是ヲ味方之事ハ不及申敵方ニモ大ニ褒候既ニ

大坂後之御陣五月末ニ板倉伊賀守所ニテ織田

淨信入道信雄公・横田甚右衛門・初鹿傳右衛門・米倉六郎右衛門ニ被 仰者信長モ山ヨリ見テ馬場美濃守様子ヲ大ニ御褒候、當代唐ニモアノコトク人数ヲ仕者有間敷ト御申候ト淨信被 仰候、某小幡勘兵衛モ末座ニテ承候、以上、

四 瀧川衆モ尺之木之外エ出テ備ヲ持、内藤衆懸テ切

崩既二三拾四人討取、其内三人者本之侍也、残りハ旗指或ハ長柄鎧カツキ或ハ弓鉄砲之歩足輕也、所あぜ道左右田ニテ候故内藤衆早々引揚也、

五 其前カタ 権現様使ヲ被遣敵少人数ニテ候トモ

如斯二候、御引入尤之由、被仰候、其返事ニ其方カ等之コトクニ逆ハスマシキトノ返事也、其御使佐久間

右衛門エハ小栗大六・浅井六之助・飯尾次郎左衛門三人、瀧川所エハ浅井眼兵衛・香村善七郎・柴山五作・頭小兵衛ト改佐久間モ瀧川モ返事ハ其方等ガコトクニ逆ハスマシト

御返事申候、

六 家康公被仰其指捨置候、極テハ某迷惑ニ成候ト

被仰御馬ヲ早メ信長公旗本河上山エ御越有テ佐久間瀧川引入間敷ト被申候、敵小人数ニテ候、其付入ニ仕リ

凶事出来候へ者、尺之木被仰付其甲斐無御座如何ト被 仰、信長公尤ト御説ニテ佐久間・瀧川両侍大将エ御

使被遣間ニ早右之通押崩候、三河侍衆大ニ笑ヒ候へは題シテハ其色見せず候、信長公ヲ加勢ニ御頼シ

カモ信長様之御斟酌之取成故、内々ニテツブヤキ申候、此段者柴山小兵衛・安藤帶刀・彦坂小刑部・松平

石見守四人ニ五度某小幡勘兵衛承届候、以上、右之通荒々モ不書付候へは合戦場之様子或尺之

木之様子一圖合点不参候間如此候也、

右合戦者一二大宮原・二二柳田・三三竹廣・四二正楽寺之前五二鷗巢・六二長篠城之前都合六所ニテノ事也、

(35)

狩野文庫には本作【請求番号(狩・二三三八七二)】以外にも、三州長篠合戦図(狩・二三八三三三)、三州長篠戦図(狩・二三八三四四)、参州長篠ノ図(狩・二三八六六一)、参州長篠古戦之図(狩・三三二六四四)、長篠合戦絵図(狩・二三八六七七)、長篠合戦正図(狩・二三八六八八)、長篠合戦図(狩・二三八六九九)、長篠合戦図(狩・二三八七〇〇)が所蔵される。これらは、戦場よりも地域全体をとらえたもの(狩・二三三八七〇)、成瀬家

本に近似した山を重ねる自然表現であるが、岩肌の描写が無いもの(狩・二三八六八)、自然描写は立体感があるが、連吾川、宮川を描かないもの(狩・二三八六七七)など、成瀬家本の図様形成をなすには不十分であると分析した。しかし、なかには『長篠日記』の原本を記したと推定される乗本村阿部四郎兵衛定次の養子忠政の識語を有する絵図もある(狩・二三八六九九)。忠政は、鳶巣山砦奇襲に参戦したとみられている(『寛政重修諸家譜』)。「長篠日記」は当地域で成立し、現存する写本は『甲陽軍鑑』と『甫庵信長記』の影響が指摘される(丸山俊治「長篠日記」写本群の立ち位置―江戸期に成立した写本を中心にして)『新城市設楽原歴史資料館 新城市長篠城址史跡保存館 研究紀要第十九号』新城市設楽原歴史資料館 新城市長篠城址史跡保存館、二〇一五年)。この絵図も岩の描写がみえないため、成瀬家本制作に關与した系統とは考えにくい、が、『甲陽軍鑑』系統の絵図との比較など、別稿を用意し検討したい史料である。

(36) 前掲註二一、湯浅。

(37) 長篠合戦絵図の中には瀧川の橋を省略、または一本線で簡略的に記すものが多い。註三五で記した絵図では管見の限り、三州長篠合戦図(狩・二三八三三三)、参州長篠ノ図(狩・二三八六一)、長篠合戦絵図(狩・二三八六七七)、長篠合戦図(狩・二三八六九九)、長篠合戦図(狩・二三八七〇〇)が該当する。

(38) 前掲註一、高橋。前掲註二、高橋、一二頁。

(39) 前掲註二八、酒井『甲陽軍鑑』(本文篇下)一一五頁。

(40) 一九世紀制作の東博本下絵では、狩野文庫本と同位置に大久保兄弟を描く。『甲陽軍鑑』では、武田軍を大きく六部隊に分け、一番隊を馬場信春、二

番隊を内藤昌豊、三番隊を山県昌景、四番隊を武田勝頼旗本衆、五番隊を武田信実、六番隊を高坂昌澄としている。しかし、成瀬家本の人物配置は『甫庵信長記』の影響が大きいことから(前掲註七、内田)、同書を基本に検討した。本稿において『甫庵信長記』は、神郡周『信長記』上(現代思潮社、一九八一年)を参照した。同書によれば、この「追遥軒と云ひし者、音もせず静まり返つて推来る。是も家康卿の鉄砲に射立てられ」とあり、成瀬家本はその直前の様子をとりえていると考える(神郡、二一〇頁)。

(42) 成瀬家本の人物配置が『甫庵信長記』を基にしていることは、内田九州男氏により検証されている(前掲註七、内田)。

(43) 合戦図制作に絵図が關与した可能性は、東博本下絵の制作工程を記す狩野晴川院養信著『公用日記』から示唆される。以下翻刻を記す。

昨夜御絵番坊主(良栄)来り、内々之趣、今朝御小性

頭取太田下総守〈新番頭格〉江相話、薄々、御聴にも入り、大坂御陣、長篠・長久手御用二付、相下居候、御書物、御絵本之類、早ク納置候方、安心にも可有之旨、御沙汰二付、夕刻、御絵番差添〈良栄〉取二来ル、則認掛ケ御屏風共差出如左、

御屏風二双〈片長篠認掛ケ、片長久手白紙〉、

一 指物揃 壹箱

一 諸將旗旌圖 三冊

一 信玄備之圖 二枚

一 馬印屏風写 十二枚

外書付一通

一 大坂御陣□^{（墨）}様子之拾枚折屏風下絵、

五枚統二指、右長谷川宗也筆、

一 同御陣取巻絵圖 一枚

一 保元物語 三卷

一 保元平治屏風拔写 二卷

右之通返上了〈文化五〈辰〉年正月十三日、養川院殿病死之節ハ、同正月廿六日、右之通返上之由也〉、

『公用日記』（文政一一年七月四日条）

ここにみる東博本下絵や「大坂御陣」〔大坂冬の陣図屏風〕は明治一九年（一八八六）、晴川院の孫謙柄氏から、当時の帝室博物館（現東京国立博物館）に寄贈された。このほか多数の陣取図も寄贈されている（東京国立博物館編『収蔵品目録』（絵画・書跡・彫刻・建築（一九五二年）、四二一頁。金子拓「東京国立博物館蔵「長篠合戦図屏風」」金子拓編『長篠合戦 いくさの記憶』（勉誠出版、二〇一八年）。）。

（44）井上泰至『サムライの書斎』（ぺりかん社、二〇〇七年）、一六頁。

（45）前掲註八、宮島。

【図版出典】

図1、2、4、7、9、12、26、28、39…

桑田忠親（ほか）『普及版 戦国合戦絵屏風集成 第一巻 川中島合戦図

長篠合戦図』（中央公論社、一九八八年）より転載。

図3、6、7…

徳川家広編『徳川家康没後四〇〇年記念 天下泰平 徳川名宝展』（講談社、

二〇一六年）より転載。

図5…『時を超えて語るもの 史料と美術の名宝』（東京大学史料編纂所、

二〇〇一年）より転載。

図9、12、26、29、38、40…筆者撮影。

図10…『風林火山 信玄・謙信、そして伝説の軍師』（NHK、二〇〇七年）より転載。

図11…東北大学デジタルコレクション「長篠合戦之圖」より転載し編集。

図13…桑田忠親（ほか）『普及版 戦国合戦絵屏風集成 第三巻 関ヶ原合戦図』（中央公論社、一九八八年）より転載。

図14…田中一松（ほか）『日本美術全集一五 北山・東山の美術』（学習研究社、一九七九年）より転載。

図15…後藤茂樹編『浮世絵大系一五 木曾街道六拾九次』（別巻・Ⅲ）（集英社、一九七五年）より転載。

図27…致道博物館より画像提供。

図28…致道博物館より画像提供。

資料一…筆者撮影（二〇一五年）。

資料二…桑田忠親（ほか）『普及版 戦国合戦絵屏風集成 第一巻 川中島合戦図 長篠合戦図』（中央公論社、一九八八年）、東北大学デジタルコレク

ション「長篠合戦之圖」より転載し編集。

【附記】本稿は、二〇一五年二月二四日学習院大学文学部哲学科に提出した卒業論文「長篠合戦図屏風の探究」を基に、平成三〇年度学習院大学秋季哲学会（二〇一八年二月二四日、於学習院大学）において口頭発表した内容の一部を加筆・修正したものである。卒業論文や口頭発表にあたっては、学習院大学の佐野みどり先生、島尾新先生に懇切丁寧なご指導を賜った。本稿執筆に際しては、一橋大学若尾政希先生から軍記を基にした絵図研究への取り組み方を、防衛大学校井上泰至先生から狩野文庫本をはじめ絵図に関する貴重なご教示を賜った。このほか学習院大学松波直弘先生、田中潤先生にもご指摘とご助言をいただいた。そして、査読委員の先生方には掲載に至るまで大変懇切丁寧なご指導を賜った。また、諸機関の皆様にもご高配を賜った。末筆ながらここに記して心より御礼申し上げます。

【査読総評】（五十音順）

・近時長篠合戦図屏風については、歴史学の立場から様々な論及がなされ、新たな見解が提示されつつある。美術史学からは絵画史的な視座から当該屏風を考察すべきという提言がなされていたものの、それが具体的に検証されることはなかった。本論考では、先学の提言、すなわち合戦図屏風の表現には、地図的なものの名残をとどめているとの指摘に基づき、多数が遺存する長篠合戦の絵図から良質な史料を選別した点、絵図的な表現を具体的に指摘し、当該屏風への絵図の関与を見出した点を高く評価したい。一方、当該屏風と絵図との共通性の指摘が多くを占め、絵図に依拠しない表現およびその理由への言及が比較的少なかったかと感じる。合戦図屏風においては史実の再現性のみが主眼となるのではなく、発注者の意向も大きく表現に影響していることは、先学により指摘されており、主に史実を重視した絵図だけでは、当該屏風成立の全体像を見失う恐れを感じたからである。この点は次稿に期待したい。また、山川や橋梁表現の検討において、当該屏風の制作時により近い時代の絵画史料との類似および相違の指摘があれば、本屏風の表現がどのような源流を持つのかに一層迫ることができたのではないかと考える。いずれにしる人物表現を中心に考究されてきた従前の合戦図研究にあつて、本論考では山川や橋梁などにも着目し、絵図の関与が認められたとする点、今後の合戦図屏風の考究に寄与する論考であると評価したい。

（大阪歴史博物館 学芸員 岩佐伸一）

・昨年に投稿された「長篠合戦図屏風」の展開からテーマを絞り、美術史研究に相応しい体裁へと加筆修正いただいた内容である。「長篠合戦図屏風」のうち、尾張藩付家老・成瀬家に伝来した「成瀬家本」と絵図との関係性を論じた。並木誠士氏による指摘があったとはいえ、甲州流軍学の教本『甲陽軍鑑』の流伝に寄与した小幡景憲に着目し、その意向で制作された「長篠合戦絵圖」（東北大学附属図書館）を見出して検討した観点はユニークである。確かに現存最古とされる「名古屋市本」は「絵画」としての屏風であり、地形に関してそれほど考

慮されているとは見えないのに対し、「成瀬家本」には山川の配置や布陣の位置に対する配慮が明らかである。ただし、「成瀬家本」と「絵図」の比較の一方で、「絵画的要素」を論じる際にはより適切な作品を選択すべきである。小幡景憲の意向が反映された絵図は、「長篠合戦図」のみにとどまらない他の合戦図への波及も想定され、より意義深いテーマに発展する可能性が見込まれるため、継続的な研究が望まれる。筆者とは一年間にわたつてさまざまなやり取りを行い、時には厳しく忠言させていただいたが、その忍耐力や精神力には目を見張るものがあつたことを付言しておきたい。

（東北大学大学院文学研究科 准教授 杉本欣久）

・本論文は現存する合戦図屏風の中で最も多い「長篠合戦図屏風」について、その祖型となった成瀬家本を、東北大学狩野文庫本の「長篠合戦図」という絵図と比較することによって、山や川などの位置関係や地形表現に多くの類似点を確認できることを示したものである。成瀬家本が絵図的であるとの指摘はすであつたが、具体的に狩野文庫本を提示した点は新しい。また、絵図との比較のみならず、軍書との比較や再検討もおこなうことで、絵図のみでは情報が不足するため、軍書に立ち返って詳細な情報を補填し、成瀬家本の図様が完成したとの可能性を示唆した点も高く評価できる。とはいえ、執筆者は、多くの屏風で金雲などが果たしてきた場面転換の役割を成瀬家本では山や川が担い、また、異時同図法にあたつても山が用いられたことを指摘しているが、であれば、画中の山や川は場面転換に依拠して、ある程度の改変が許容された可能性も出てくるわけで、地理的な正確さに依拠する論旨の蓋然性を損ないかねない。図様の中で山や川の正確な位置関係が最も優先されたのか、あるいは部隊の位置関係や登場順が優先されたのか、場面転換が優先されたのか、その優先順位に関する見通しや検証も必要だろう。こうした図様における優先順位の問題は、先祖の武功を賞揚しようとする意図する合戦図が、本来的にはらむ課題でもあり、それらを整理したうえで、今後の人物表現の比較を期待したい。

（東京文化財研究所 研究員 安永拓世）